

1. 本報告の目的と分析方針

毎日新聞と雑誌『学校図書館』が実施している読書調査をみると、子どもの読書は2001年の「子どもの読書活動の推進に関する法律」施行以降、大きく変化しているといえる。例えば「5月1ヶ月間の平均読書冊数」や「不読者数」は2001年の「子どもの読書活動の推進に関する法律」施行以降、大きく変化している。例えば中学生は、80年代以降1.6冊から2.3冊を前後していた「5月1ヶ月間の平均読書冊数」が2001年以降上がり、2010年には4.2冊となり、その後も4冊前後を推移している。また「不読者」もこれまでは高い時には55.3%（1997年）など40%から50%の間を推移していたものが、2002年には32.8%、2010年には12.7%に減少している。

このような変化について『学校図書館』では、「朝の読書」への取組の広がり大きいと解釈されている。

これまで「子どもの読書活動」をめぐる様々な制度やサービス提供側の取組について研究・報告が蓄積されてきた（坂田他2012等、林1997、大塚1995等）。一方で、「子どもの読書活動」それ自体がどのように活動として組織されているのか明らかにしようとする試みは少なかったといえる。本論は、実際に学校の中でなされる「子どもの読書活動」を、フィールドワークでの参与観察データを用い、エスノメソドロジー（前田他2007）の観点から分析し、『学校図書館』の調査結果に示唆されているような「子どもの読書活動」の変化の一側面を明らかにする。

そして、本報告が分析において注目するのは、先述の通り、『学校図書館』調査においても子どもの読書に大きな変化をもたらしていると解釈されていた「朝の読書」である。

2001年の「子どもの読書活動の推進に関する法律」施行後、2002年の「子どもの読書活動の推進に関する基本計画」において「朝の読書」は子どもの読書推進のための取組の一つとして明記され、実際に多くの学校で取り組まれ、88.2%の中学校が実施している（文部科学省2014）。

多くの学校で取り組まれている「朝の読書」は、現代における重要な読書活動をもたらす制度だといえよう。それならば、それが活動としてどのように組織されているのかを明らかにすることは、現代の「子どもの読書活動」を規定する重要な制度を内側から明らかにすることになる。

また、もう一点注目したいのは、休み時間の読書である。「朝の読書」のように制度的に「読書」活動がもたらされるのとは異なり、休み時間で書籍を読むことは生徒それぞれが自由に取り組む。このようないわば自由な読書が休み時間においてどのようになされているのかは、これまでの研究においてほとんど注目されてこなかった。しかしながら、これは読書をめぐる諸制度の副次的な効果を活動の側面から明らかにするという点で非常に重要である。

2. 本報告の対象と調査

「子どもの読書活動」といっても、家庭をはじめ様々な場面でなされるものである。本報告はその中でも「学校」、特に「公

立中学校」、その中の特に第一学年を対象とする。

調査は、2009年1月から3月にかけての3か月、さらに2010年の9月から10月にかけての2ヶ月、加えて2011年の4月に1ヶ月間行なった。全観察日数は78日、調査地は九州の公立中学校である。学校規模は、2009年時点で全校生徒が270名(男女比はほぼ同数である)、職員数は23名だった。特に2009年度の第一学年72名(三つの少人数クラスから構成されている)を対象に継続的に行っている。

調査期間中、筆者は「子どもの遊びとメディア利用」についての調査者、そして学習指導ボランティアとして調査対象校に滞在した。調査手法としては調査開始時に第一学年全生徒を対象としたメディア利用についての簡易アンケートを行い、以降は生徒と共に登校から授業、休み時間、放課後の部活動(ほぼ全生徒が部活動に参加)から下校まで共に過ごしながらの参与観察を行い、適宜フィールドノーツを作成した。また昼休みや放課後を利用して第一学年全生徒を対象にグループインタビュー(4名から8名のグループで実施)を行った。

本報告では、その中でも特に参与観察で確認された「読書活動」について書かれたフィールドノーツを分析対象の一つとする。

3. 学校の中の読書をめぐる制度

3-1. 学校の中の「読書」制度の比較

読書装置(永嶺 2004)としての「書籍」(「読書」における読むものの対象の定義についての揺らぎについては米谷 2007)の提供という観点から、学校の中の読書制度の比較を行う。特に、書籍というモノを学校

の中にもたすこと、安定的に置いておくことに注目する。

学校図書館や学級文庫は当然ながら図書室や教室の一角に一定の書籍を置き、貸出を行うことを主たる目的としている。これら制度の「書籍」提供に関する特徴は、「持ち寄り文庫」などの実践はあるものの、基本的には学校側が書籍を選定し、特定の箇所に配置することであろう。一方で、「朝の読書」は、学校図書館や学級文庫に配架された「書籍」を用いても良いが、その理念において各自が家庭から書籍を持ってくるのが推奨されている。そして、実際にフィールドにおいてもそうされていた。この時、「書籍」は生徒各自が家庭で書籍を準備し、学校に持って行くことになる。つまり各自の机・カバンの中にいつも「好きな本」があることになる。これは「書籍」という読書装置の偏在から遍在という変化を意味していた。

また、「朝の読書」は学校の中に存在する「書籍」の内容についても大きな変化をもたらしている。学校図書館や学級文庫が「教科課程の展開」と「教養」に関わる書籍を期待されるものとして配架してきた。一方、「朝の読書」は雑誌やマンガを除く各生徒の「好きな本」を読むことになっている。『学校図書館』の2009年11月号の読書調査結果の解釈において、不読者の減少の一つの理由として「ケータイ小説」の人气が挙げられているが、このような学校図書館にはそれまで配架されにくい(公立図書館については米谷他 2008)書籍が学校に多く持ち込まれ、生徒に読まれていることは、「朝の読書」理念の一つである「好きな本を読む」ことによるものだと考えられる。

3-2. 学校の中の読書の活動的特徴

では、二つの制度が実際にどのように経験されているのか、フィールドノートの記録をもとに分析を行う。注目すべきは、制度自体が学校の時間・空間の中で、どう利用されているのかという点である。

学校図書館（図書室）は、その学校における位置が、利用の際に重要な側面となる。主たる調査対象であった第一学年の教室と図書室は必ずしも手軽にアクセスできる位置関係ではなかった。調査期間中、参与観察の限りにおいて、10分休みや昼休みに利用する第一学年の生徒は他学年に比べて少なかったと言える。

一方で、学級文庫は第一学年のそれぞれのクラスに設けられており、担任の教師が選んだ書籍が三段のカラーボックスに配架されていた。配架されていた書籍の内容は、各担任によって大きく異なり、一つのクラスは学校図書館協議会のマンガ選定基準に準ずるストーリーマンガや、週刊少年マンガのノベライズ文庫が配架されており、多くの男子が休み時間に読んでいた。一方で、クラスによってはあまり利用されていない学級文庫もあった。つまり、学級文庫は担任の先生の運営によって、その利用のされ方も大きく異なっていたといえる。

以上のような制度がもたらす読書は、生徒各自が自由にそこに足を運んで利用するものであり、それ故に利用のしにくさが際立つことがあった。一方、「朝の読書」は全生徒が、朝のSHR前の10分間に必ず読書に取り組むものというものである。ここで重要な点は、この特定の時間、しかも朝のSHRの前に、すべての生徒が読書をするこ

との意味である。これは実践理念(大塚 1995 等)においても指摘されているが、この取組によって静かなSHRを迎えることができること等が重要視されている。いわば他の活動の資源として読書活動が位置づけられている。そして、実際にフィールドにおいても生徒達は担任と共に朝の読書に取組み、その後、流れるようにSHRへと展開されていた。

4. 「朝の読書」の「休み時間」への影響

3で確認した通り、「朝の読書」によって各自の机の中に好きな書籍があるという状況の中、休み時間に「朝の読書」のために持ってきた書籍を読む様子を観察することができた。「好きな本」を読むことがその実践理念としてあるために、休み時間にも読むことができているものと考えられる。彼／彼女らは、図書室に配架されている本ではなく、各自が持ってきた「好きな本」を読む。その中でも特徴的だったのは、「ケータイ小説」である。

複数の女子生徒は当時ドラマ化されていた『赤い糸』をはじめとする「ケータイ小説」の文庫版や書籍版を「朝の読書」で読んでいた。さらに、彼女達は休み時間も集まって、机を寄せ合って「ケータイ小説」を黙読し、その後に感想を語り合い、さらに互いの恋愛観と関係付けながら話し合っていた。また、彼女たちは互いに購入した「ケータイ小説」の貸し借りを行っていた。当時「ケータイ小説」は学校図書館には配架されておらず、比較的短時間で読み終えてしまう「ケータイ小説」を次々に購入することは生徒たちにとっては経済的に難しい。女子生徒たちは互いに所有する「ケー

タイ小説」のタイトルを把握し、他人の持っていない「ケータイ小説」を購入し、それを貸し借りしていたのである(團 2013)。このような「ケータイ小説」読書の関係性自体、学校図書館等の制度とは異なる書籍の持ち込まれ方の中で生じていたことは重要な点である。

一方、男子生徒は部活動に合わせたスポーツ選手に書かれた書籍やマンガ原作のノベライズ、テレビゲームのノベライズ等の書籍を朝の読書で読み、女子同様、休み時間にも読む男子生徒は一定数確認できた。

このように「朝の読書」によって全ての生徒の手元、机の中等に必ず書籍があるという中、一定の生徒が10分休みの時間にも読書を行っていたのである。

加えて、注目すべきは「好きな本」として選ばれ生徒が持ってきている書籍の内容の傾向である。女子の「ケータイ小説」や男子のマンガ作品のノベライズに象徴的なように、これらの書籍は元々ケータイというメディアやコミック、マンガ雑誌といった異なるメディアで読まれていた作品の書籍版、メディアミックス作品である。以上で見られるような読書活動は学校図書館や学級文庫といった選書することを伴う制度とは異なる「朝の読書」に伴って生じた読書活動だといえよう。

以上みてきたように、学校の中での読書活動、特に2002以降多くの学校で取り込まれることになった「朝の読書」とその制度としての特徴のもと、多くの生徒が休み時間にも読書活動に参加し、各自が「好きな本」を読んでいた。

冒頭で紹介した『学校図書館』で指摘されていた、読書冊数の増加や不読者数の減

少の背景を考える時、以上みてきたような具体的な活動レベルにおける学校の中の読書の変化は極めて重要な示唆を与えるものであり、何より現場において「子どもの読書活動」に何らかの働きかけを行わなければならない実践者にとっては、ここで示してきたような具体的な事例の構造が重要な知見となるものと考えられる。

参考文献

團康晃(2013)「学校の中のケータイ小説——ケータイ小説をめぐる活動と成員カテゴリー化装置」『マス・コミュニケーション研究』(82) pp.173-191.

林公(1997)『朝の読書 実践ガイドブック——日10分で本が好きになる』メディアパル

前田泰樹ほか編(2007)『ワードマップ エスノメソドロジー』新曜社

永嶺重敏(2004)『〈読書国民〉の誕生』日本エディターズスクール出版部

大塚笑子(1995)「読書意欲を高める校内読書活動の実例3 朝の読書はどんな奇跡を生んだか 《千葉県・船橋学園女子高等学校》」『学校図書館』(537), pp30-32.

坂田仰・河内祥子編(2012)『教育改革の動向と学校図書館』八千代出版.

米谷優子(2007)「子どもの読書活動推進計画に見る「読書」概念の分析と比較検証」『情報学』4(1).

米谷優子, 川瀬綾, 北克一(2008)「ベストセラーとなったケータイ小説の公立図書館所蔵に関する一研究」『情報学』5(1)